HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 10
Issue Date	2017-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65050
Type	other
File Information	020_1882-1707_10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻頭言

ここに、『未完のムクドリ：多世代多様な場で起きていること』をお届けします。本紀要は、人が守られ育まれるコミュニティのあり方をめぐって、むくどりホーム・ふれあいの会の実践を参照しながら展開された共同研究の成果です。2014 年の秋から 2015 年の年末にかけて、カンファレンスや座談会の方法により、実践者と研究者が協働して実践の普遍的意味を考察してきました。

「人の育ち」が盤石で揺ぎなかった時代というものは、おそらくないのでしょう。後から振り返れば、あの時代は良かったと見えるものです。しかし、いつの時代も、表面には現れないさまざまな矛盾を抱えているはずです。そうした諸矛盾が、一定の限界に達したとき、私たちは重い腰をあげて、問題に対峙しなければならなくなります。歴史の転換期と言えば易しいですが、それ以外の表現が見当たらないほど、2010 年代の日本は「人の育ち」の問題に真正面から向き合わざるをえなくなっています。本研究も、その運動の一端です。

この紀要は、3 部から構成されています。「第Ⅰ部　むくどりの夢」では、むくどりホーム・ふれあいの会の会長である柴川明子さんの論文と、その実践の普遍的示唆を語り合う座談会によって、むくどりホームの追求する世界を考察しています。続く「第Ⅱ部　むくどりのリアル：スタッフの視点から」では、むくどりホームの検証作業の当時常勤スタッフであった 3 人が、むくどりホームとはどのような場かという問いに関する省察を行っています。そして、「第Ⅲ部　ムクドリへの視座」では、研究者による 2 つの論文によって、むくどりホームの実践がもつ人間発達研究への示唆と、その社会史的意味を分析しています。

＊　　＊　　＊

私たちの子ども発達臨床研究センターでは、2011 年度から「研究プラットフォーム委員会」という一風変わった組織をつくり、現代社会における「人の育ち」にまつわる諸矛盾を解きほぐす学際的かつ実践的な共同研究を継続してきました。学術界になじみのない方は不思議に思われるかもしれませんが、同じ部局を構成する身近な研究領域であっても、実践的問題を共有し、それを協働的に解き明かしていくための概念（言葉）や方法をまとめていくことは至難の業なのです。しかし、現実の問題は分断されていません。すべてがつながってある現象が起こっているのですから、そこにどうアプローチしていくかというのが、いま研究者にとって最も挑戦的で、スリリングな課題のはずです。私たちの歩みはゆっくりですが、それは性急な解答を求めてはならないテーマに取り組んでいるがゆえです。

本紀要以前には、以下の成果も刊行しておりますので、あわせてご参照いただけましたら幸いです。北海道大学図書館ホームページで、「資料を探す」→「HUSCAP」→「教育学研究院」と進むと、すべてダウンロードすることができます。

- 2012 年「遊ぶ・学ぶ・働く：持続可能な発達の支援のために」（シンポジウム報告書）
- 2013 年「『生きづらさ』を超えて」（シンポジウム報告書）
- 2014 年「Development 概念の転換：支援の背後にある困難性を探究する」『子ども発達臨床研究』第 6 号（特別号）

本来、2016 年 3 月の刊行を目指しておりましたが、諸般の事情により 1 年の猶予をいただいた次第です。むくどりホームの皆さんをはじめ、関係者の方々には作業の遅れをお詫びするとともに、ここに完成を迎えるに至りましたこと、記して深謝申し上げます。

（川田　学）

※本紀要は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「異年齢期カップリングの発達学：子どもの生きづらさを超えるための学際的協働」（課題番号：15H03105）による助成を受けて発行された。